

二、玉耶

お釈迦さまは、ある時、舎衛国の、祇樹給孤独園に在して、出家や在家のお弟子たちに向かつてみ法を説いておられました。

時に、給孤独長者の家では、先に、その子のために妻を娶ってやったが、ある長者の女で、名を玉耶と言った。

形相があまりに美しかったために、傲慢の心をおこして、親たちにも、夫にも、婦としての道をつくさなかつた。そこで給孤独長者夫婦は話しあつて言った。

「子の婦は、従順でなく、礼儀を守らない。設いどんなに叱つても行おうとはしない。このまま放つておけば過失は、いよいよ増すばかりである。どうしたらよからう。」

相談のあげく、「仏様のみよく教化なさる。どんな剛情我慢なものでも従わないものはない。この上は、み仏にお出でを請うて教化して下さるようお願いしよう。」ということになった。

翌朝、長者は、服装を整えて仏の所にゆき、玉耶の日常の有様を告げて、明日お弟子方と一緒にお出で下さつて、玉耶の心をお救い下さるようお願いした。

明くる日、仏が、多くのお弟子と共に、長者の家におつきになると、長者はじめ家中の者は、皆出でて仏を礼拝したのに、玉耶のみは逃げかくれて仏を礼しようとしなかつた。

仏は神変を現して、長者の家中が透いて見えるようにしてしまわれた。そこで玉耶は、仏の尊い相好を見て、心に怖れと驚きを抱き、遂に出でて仏を礼拝した。

そこで仏は説法を始められた。

顔かたちだけが美しいばかりでは、つまらない。あらゆる悪をのぞき、心の散乱しないのが、真の端正というのであることをお説きになり、更に、女の十悪についてさとされて、女は女であることに覚むべきを教えられた。

玉耶の心が開かれて、仏を拝し、婦の生きてゆくべき道をお示し下さるように請いたてまつつた。

仏は、そこで、婦が両親や夫に仕えるのに五善三悪のあることをお説きになった。

「五善とは、

- 一、妻たる者は、晩く臥し、早く起きて、髪かたちを整え、食事するにも目上の者を先にして、心からこれに順い、もし甘いものがあつたら目上にまず供えよ。
- 二、夫に叱られても恨みをいだいてはならない。
- 三、ただ我が夫のみを守つて、姪らな念を抱かぬこと。
- 四、常に夫の長生きを願ひ、夫が外に出でた時は、家中を整頓すべきである。
- 五、夫の善を思つて、悪を思わぬこと。

以上が五善であり、

三悪とは、

- 一、親や夫に礼を守らず、甘しいものを早く食べたがり、早く寝ておそく起き、夫が教え叱ると、夫をにらみつけ、これを罵る。

二、夫のみを念わないで、他の男のことを念う。
三、早く夫を死なしめ、更に他に嫁そうと考える。以上が三悪である。」
とお説きになって、やがて、七婦の説をおきとしになった。

「世間には、七種の婦がいる。

一の婦は、母の如し

二の婦は、妹の如し

三の婦は、善知識の如し

四の婦は、婦の如し

五の婦は、婢の如し

六の婦は、怨家の如し

七の婦は、奪命の如し。

以上の如くであるが汝はわかっているか。」とお問いになり、仏はつぎのようにお説きになった。

一、母婦

母婦とは夫を愛念すること慈母の如く、昼夜その側に侍つて離れず、食物や衣服にも心をこめて供養し、外で夫があなどられることのないように、倦まず厭わず、夫を憐れむこと母の如くする、是が母婦である。

二、妹婦

妹婦というのは、夫に事えること、妹の兄におけるが如く、誠をつくし、敬い尊び、異体同心、微塵の隔てがない婦のことである。

三、善知識婦 (師婦)

善知識婦というのは、愛念、ねんごろにして、恋々として相棄つること能わず、何事も打ち明けてその間に秘密のことなからしめ、もし夫に過失があれば、教え呵めて之をくり返すことなきようにし、善いことがあれば、それを称め敬うて、更に善事にむかわしめ、相愛してゆくこと、善知識が人を導くような態度をもつて夫に侍するのが、善知識婦である。

四、婦婦

親には誠をもつて供養し、夫に事えて、へりくだつて其の命に従い、早く起き晚くねて、身、口、意の三業をつつしみて、なおざりでなく、善いことはほめ、過は自分の身にきて、人たるの道を歩み、心端く婦としての節操を持つてかぐ所なく、礼を守り、和を貴ぶのが婦婦である。

五、婢婦

常に自ら慎んでたかぶらず、まごころあり、言葉柔らかに、粗野でなく、性は和らかく、横着でなく、心を正しく、礼をもつて夫に事え、それを受け入れられても、たかぶることなく、たとい受け入れられなくても恨みもせず、むち打たれても、ののしられても、甘んじて受けて恨まず、夫の好む所は勧めてやらせ、嫉妬せず、冷たくされてもその非を口にせず、貞操を守り、衣食の、善悪を言わず、ただ自分のたらないことを恐れて夫につくすこと、下婢が主人にするようなのが婢婦である。

六、怨家婦

夫が欲ばなければ、これを恨み瞋り、昼夜に夫と離別ようと考え、夫婦の心のないこと一時の客の如く、犬のほえるように喧嘩して畏れず、頭を乱して臥て、作使れない。家を治め、子を養育する心なく、他に對して姪らな心をおこして恥とせず、自分の親里すら謗つて犬畜生のように言う。一切が怨の家にいるような生活態度だから怨家婦というのである。

七、奪命婦

夫に對していかりの心をもつて昼も夜もこれに向かい、何等かの手段で夫から離れようとし、毒藥を与えたら人に知られはしないかと恐れ、親里にゆけば、あちこちに立ち寄り、夫を賊することをなし、夫が財宝をもつておれば人を雇つて之を奪いとり、或は情夫を頼んで殺そうとする。夫の命を怨み、しいたげ奪うから、奪命婦というのである。

以上が「七輩の婦」である。お説きになるのを聞いた玉耶は、唯黙つて言葉もなかった。

仏は更に、五善婦の果報をお説きになり、二悪婦のおそるべき因果をお説きになった。そして玉耶に對して

「玉耶よ、汝は七婦の中、どれを行おうとするか。」

と仰せられると、涙を流して、

「私は愚痴、無智でございました。これから過去を改めて、婢婦として、父母夫に事え、僣慢心を抱かないように致します。」

3

と誓つたので、

「善い哉善い哉。人誰か過のない者がいようぞ、過をよく改むる者は善これより大なるはない。」

とおほめになった。玉耶はすぐ十善戒を受けて、在家の信者となった。